

人口からみた超高齢社会

原 俊彦（札幌市立大学・日本人口学会前会長）

2017年3月10日（金） 13：30～14：10 基調講演（30分）
北海道大学 学術交流会館 講堂 （札幌市北区北8条西5丁目）
第1回 北海道大学大学院保健科学研究院
市民公開シンポジウム（13：30～16：30）

1. なぜ高齢化しているのか？
2. 超高齢社会とこれからのシニア
3. 北海道の少子化とその対応策

1.なぜ高齢化しているのか？

(1) 「人口転換」という歴史的ドラマ

少子高齢社会、人口減少社会、地方消滅、地方創生と、近年、人口の問題が話題にのぼりますが、今、起きていることは、「日本の人口転換」という、大きな流れの一部です。

★遅かれ早かれ、他の国々も同じ問題に直面します。日本が最先端なので、人類史上、全く、未知の時代に入りつつあるということを理解しましょう。

3

多産多死から少産少死へ

「人口転換」という歴史的変化

- 死亡率の低下→長寿化
- 出生率の低下→少子化

*** 日本だけでなく、世界共通。**

図1 長寿化：過去から未来へ

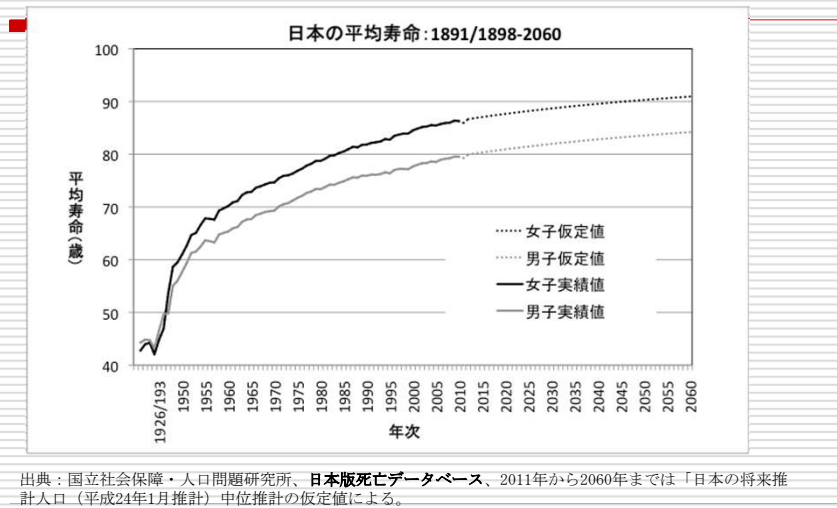
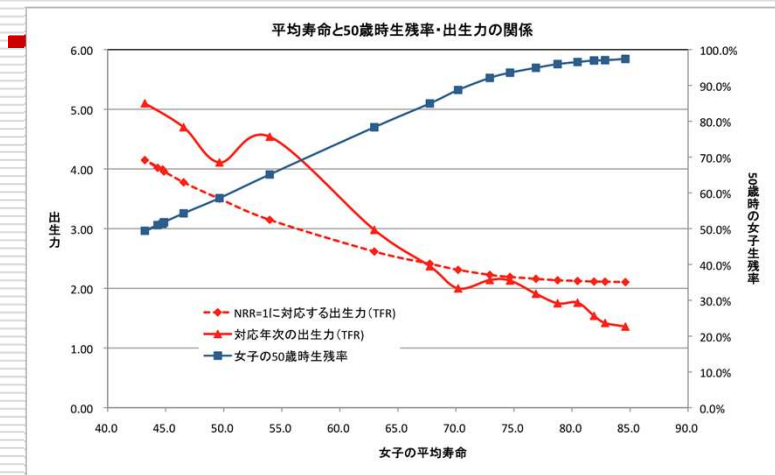


図2 少子化：過去から未来へ



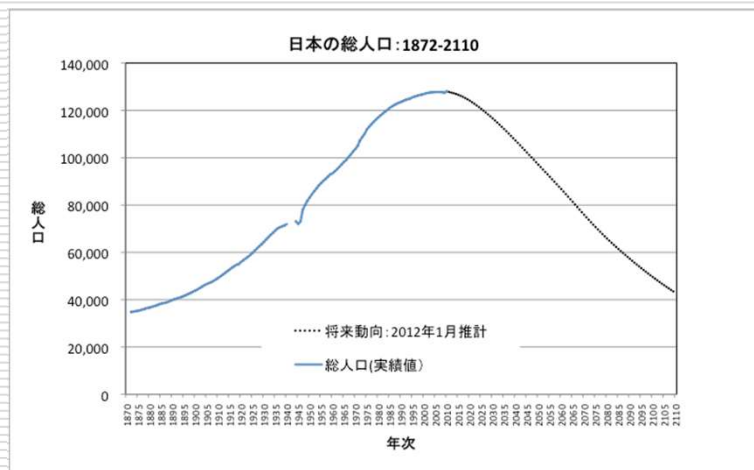
図3 長寿化と少子化の関係



出典：女子の50歳時生残率は各年の生命表による。再生産水準に対応する合計出生力は、 $1 \div (\text{出生時女児割合} \times 50\text{歳時生残率})$ で求めた。歴史的な合計特殊出生率の推移は国立社会保障・人口問題研究所（2012）「人口統計資料集2012」による。

7

図4 日本の人口：過去から未来へ



出典：総務省統計局監修（2006）「新版 日本長期統計総覧 第1巻」日本統計協会、2010年から2060年までは国立社会保障人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）中位推計による。

(2) 年齢構造の変化

日本の総人口は、2008年(平成20年)をピークに減少に転じ、すでに毎年30万人ぐらい減っています。

江戸時代(3千万人弱)や戦前(7千万人)に比べれば、2060年の8600万人でも、まだ多く、単に元に戻るだけではないか？ という意見を耳にします。

でも、年齢構造が全く異なる点を忘れてはいけません。

9

人口ピラミッド：年齢構造

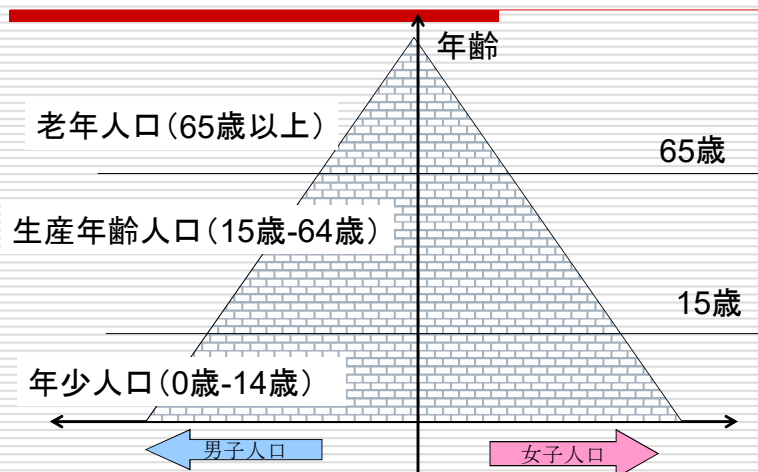
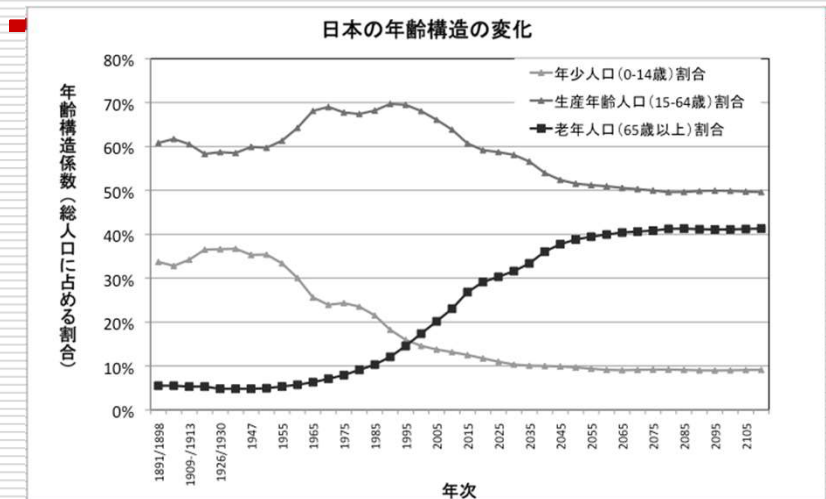


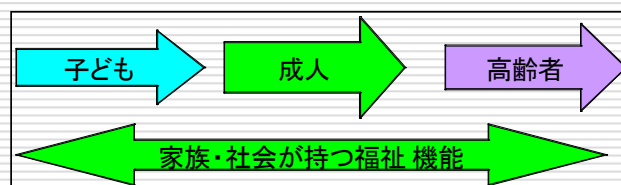
図5 日本の少子高齢化：過去から未来へ



出典：国立社会保障・人口問題研究所、「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」、資料表1-（2）、中位推計の仮定値による。

世代間関係

- 世代間の扶養関係：就業可能年齢にある世代が、未就業の次世代を産み育てると同時に、すでに先行世代を養育する。



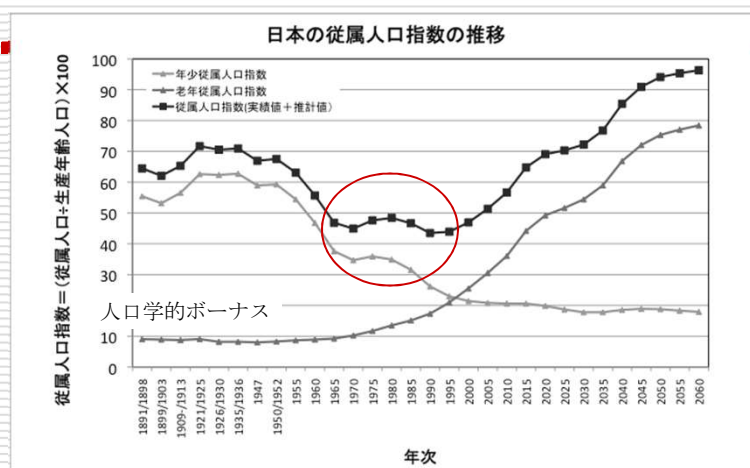
- どんな社会でも、この仕組みは変わらない。⇒年齢構造が変化すると、このバランスが変わる。

年齢構造⇒世代間の扶養関係 従属人口指数って、何？

- 年齢階級別人口（三区分÷総人口＝割合（％）
 - 年少人口（0歳-14歳）割合（％）
 - 生産年齢人口割合（15歳-64歳）割合（％）
 - 老年人口（65歳以上）割合（％）
- 従属人口指数（負荷）＊比率だから単位なし

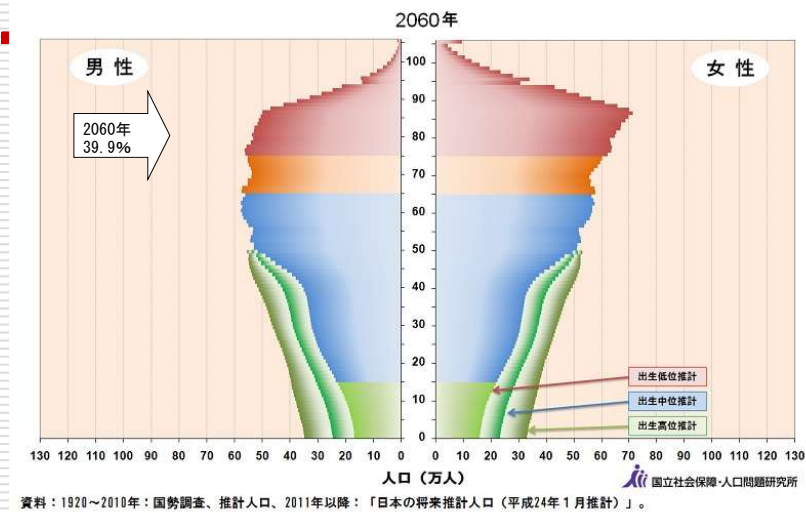
$$\left[\frac{\text{年少人口} + \text{老年人口}}{\text{生産年齢人口}} \right] \times 100$$
 →分子がいずれか一方のみ
- 年少従属人口指数→社会全体の子育て負担
- 老年従属人口指数→社会全体の高齢者ケア負担

図6 従属人口指数の変化：過去から未来へ



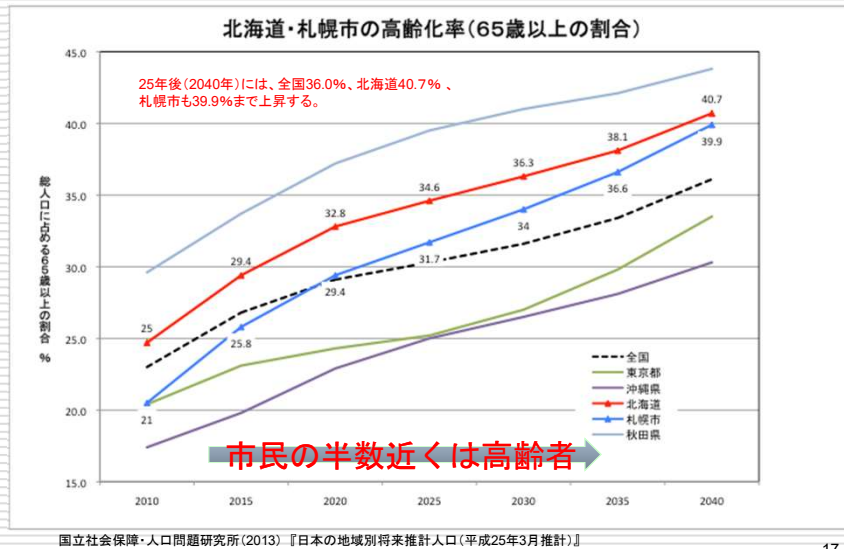
出典：国立社会保障・人口問題研究所、
「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」、資料表1（2）、中位推計の仮定値による。

図7 2060年の人口ピラミッド



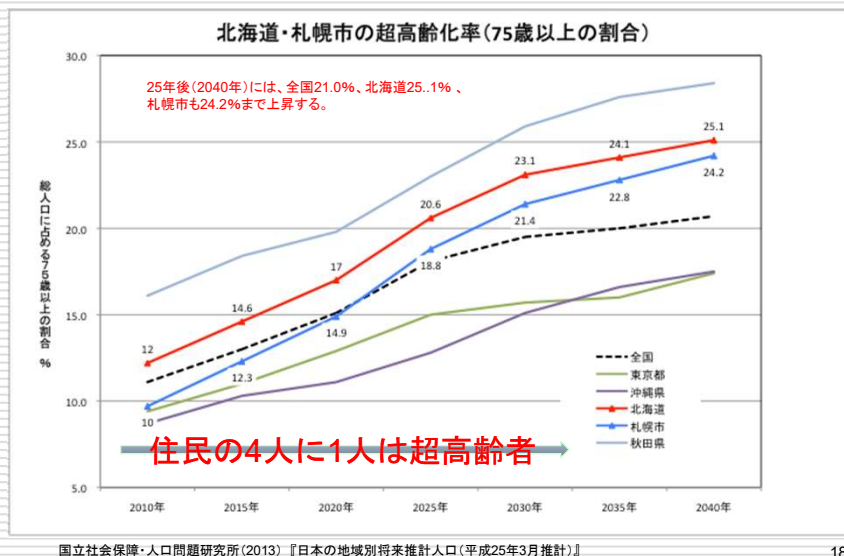
2.超高齢社会とこれからのシニア

図8：高齢化の拡大（割合）



17

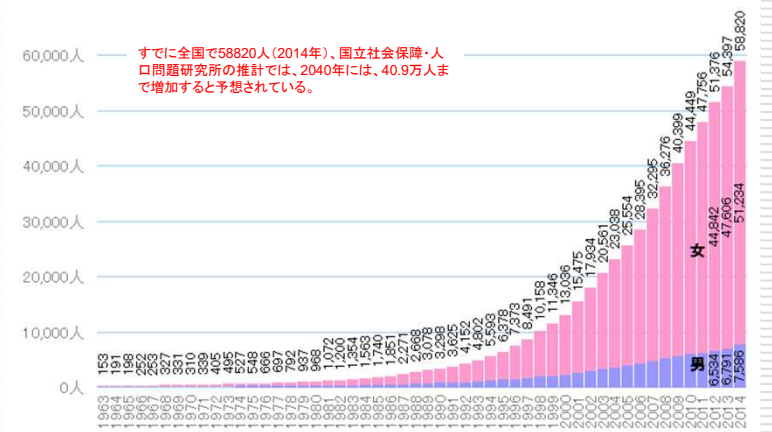
図9 超高齢社会の到来



18

図10：センテナリアン
100歳以上の増加（全国・実数）

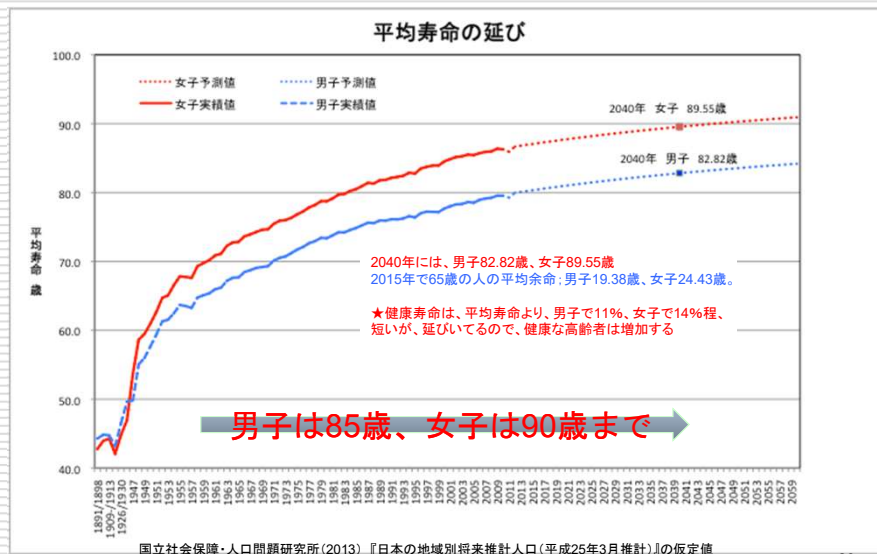
百歳以上高齢者数の年次推移



社会実情データ図録(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1163.html>) 厚生労働省 老健局

19

図11：シニアは健康で長生き



20

表1 シニアはお金持ち

世帯主の年齢階級別貯蓄及び負債の1世帯当たり現在高						単位 万円	
	平均	～ 29歳	30 ～ 39	40 ～ 49	50 ～ 59	60 ～ 69	70歳 ～
持家率(%)	83.9	37.9	56.8	75.5	87.6	94.5	93.7
年間収入	614	451	595	734	814	568	458
貯蓄	1,795	261	587	1,051	1,664	2,544	2,398
負債	521	755	1,003	1,085	607	249	76
貯蓄-負債	1,274	-494	-416	-34	1,057	2,295	2,322

家計調査 貯蓄・負債編 二人以上の世帯 詳細結果表 四半期 2014年4～6月期
総務省統計局：2014年10月31日公表

60歳以上の世帯は、持ち家率は90%以上、
貯蓄高は2300万円

国立社会保障・人口問題研究所(2013)『日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)』の仮定値

21

新高齢層（ニュー・シニア）

どんな人たち？

- ❑ 新高齢層（団塊の世代）1947-1949年（昭和22-24年）生まれ＝第1次ベビーブーム層
2015年から全員65歳以上
- ❑ 戦後生まれ・最多人口グループ・年金受給・退職引退・実年齢×（50÷80）≒終戦直後の40歳ぐらい。
- ❑ 高学歴・ビートルズ世代・ジーンズ・ワイン愛好
- ❑ 男性：全共闘→猛烈サラリーマン（企業戦士）
- ❑ 女性：アンアン/クロワッサン→ジェンダ一意識、嗜好性の強さ



これからのシニア

- 社会の中の多数派・主流→**支えられる人から支える人へ**。同世代＋若い世代をサポートする。
- 超高齢者が多くなる→**未知の世界の開拓者**
- センテナリアン(100歳以上は、現在の10倍)→**めざせスーパー老人！**＊最新の情報では平均寿命は100歳へ！
- **若返り：rejuvenation** 仕事、恋愛、再婚、出産！
- 余生は健康で長生き(平均で男性はあと20年、女性は25年)
- お金もある！(特に団塊の世代)
- **豊かで健康な高齢者の時代**(The Age of Wealthy & Healthy Elderly)の可能性 **＊ただし格差は大きい。**

23

社会の支え手として

- **創造性と社会性(creative and social skills)** が決め手となる。若い人よりも高齢者の方が有利。
- **体力、知力は機械がサポート**。Machine Learning (ML) and Mobile Robotics (MR)など。
- 長い第二の人生(セカンド・ライフ)をどう生きるか？の実験：**働くことが生きがいで、何が悪い！**
- 単なる金儲けではなく、**社会に役立つ仕事(ソーシャル・ビジネス)**を！
- 若年層の就業機会を創出し、未来に希望を与える。
- 「地域創生」の主役！

24

参考文献

- カウフマン、F. X., 原俊彦・魚住明代(訳)(2011)『縮減する社会-人口減少とその帰結』原書房
- 国立社会保障・人口問題研究所(2012)「日本の将来推計人口-平成23(2011)-72(2060)年」(平成24年1月推計)
- 人口問題研究資料第326号
- 国立社会保障・人口問題研究所(2013)『日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)』-
<http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson13/t-page.asp>
- 総務省統計局(2013)『日本の長期統計系列』第2章 人口・世帯』
<http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm>
- 国立社会保障・人口問題研究所(2012)『人口統計資料集2012』人口問題研究資料第324号
- 総務省統計局監修(2006)「新版 日本長期統計総覧 第1巻」日本統計協会
- (財)厚生統計協会(2009)「我が国の生命表 2009年4月版」CD-R(財)厚生統計協会
- 原俊彦(2007)「第7章 地域人口と地方分権のゆくえ」阿藤誠・津谷典子編『人口減少時代の日本社会』原書房、
pp. 187-208
- 原俊彦(2011)「第1章 人口減少と地方人口構造」吉田良生・廣嶋清志編『人口減少時代の地域政策』原書房、
pp. 1-22
- 原俊彦(2016)「第8章 縮減する日本社会の課題」佐藤龍三郎・金子隆一編『ポスト人口転換期の日本』原書房
- 増田寛也 編(2014)『地方消滅東京一極集中が招く人口急減』中央公論新書

ご清聴、ありがとうございました。

連絡先：原 俊彦（はら としひこ）
札幌市立大学 デザイン学部（教授）
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目 Tel: (直) 011-592-5860 (代) 011-592-2300
FAX: 011-592-2374E-mail: t.hara@scu.ac.jp <http://www.scu.ac.jp/faculty/hara/>